

JASE

現代性教育 研究ジャーナル

2015年
No. 55
2015年10月15日(毎月15日)発行

日本性教育協会
THE JAPANESE
ASSOCIATION
FOR SEX EDUCATION

〒112-0002 東京都文京区小石川2-3-23 春日尚学ビル Tel.03-6801-9307 Mail info_jase@faje.or.jp URL http://www.jase.faje.or.jp 発行人 鈴木 勲 編集人 本橋道昭
© JASE. 2015 All Rights Reserved. 本ホームページに掲載している文章、写真等すべてのコンテンツの無断複写・転載を禁じます。

contents

第22回 WAS国際会議報告……………	1	今月のブックガイド……………	9
もっと知りたい女子の性⑩……………	6	JASEインフォメーション……………	10
性教育の歴史を尋ねる⑪……………	8		

■ 第22回 WAS 国際会議報告

性科学や性（セクシュアリティ）教育の 未来を語り合い、学びあう機会に

大阪府立大学地域保健学域教育福祉学類教授
WAS性の権利委員会委員長
東 優子

はじめに

2015年7月25日～28日、シンガポールで第22回 WAS（世界性の健康学会）国際会議が開催され、51か国から371名が参集した。

WAS（World Association for Sexual health）は性科学（セクソロジー）に関する最大の国際学会であり、1978年ローマ大会を初回に学術集会・国際会議を隔年開催している。

アジア・オセアニア性科連合（AOFS）をはじめとして、世界5大陸にはアフリカ（AFSHR）・ヨーロッパ（EFS）・南米（FLASSES）・北米（NAFSO）などの下部組織が組織されている。WASには、国内の日本性教育協会、日本性科学会、日本思春期学会などが団体登録しているほか、個人会員として登録している臨床家・研究者などもある。



シンガポールの新観光名所・空中プールのある「マリーナ・ベイサンズ」

開催が危ぶまれたシンガポール大会

371名（51カ国）というのはWAS国際会議の最低記録である。シンガポールの人口は550万人でしかなく、経済格差を考慮した料金設定などもなかった

ことから、通常は多くを占めるはずの地元や周辺諸国からの参加者がほとんどいなかったのが大きく響いたものと思われる。これは WAS が契約している国際会議運営会社の「指導」も影響しているのだが、確かに「数合わせ」的に参加者数を増やしても、支払われる参加登録料が少ないのでは経営は成り立たない。この緊急事態は事前に把握されており、一時は開催そのもの中止が検討されたほどである。

開会式前日の午前 9 時に始まった役員会議では、原因の分析や対応策が話し合われた。事前配布されていた会議次第には「休憩」の文字がなく「まさか…」とは思ったが、実際に（ランチ・タイムも含めて）休憩時間を一切とらない 9 時間の缶詰状態になった。

前回ブラジル大会には 88 か国が参加（参加者数は不明）、第 20 回グラスゴー（英国）大会は約 900 名で、第 19 回イエテボリ（スウェーデン）大会が約 1,500 名だったことと比べても、この数の深刻さがおわかりいただけるのではないと思う。ちなみに、WAS 国際会議で参加者数の最高記録を樹立したのはパリ大会だったと聞いている。高額に参加登録料に加えて海外渡航費がかさばる国際会議の開催地については、観光地としての魅力が影響することを物語っているようにも思う。

FINE CITY（罰金の都）シンガポール

東南アジアの玄関口シンガポール（正式名称はシンガポール共和国）の国土面積は小さく、東京 23 区とほぼ同じ広さである。人口 550 万人の 38% が外国籍の永住者で占められており、シンガポール国籍の内訳もまた中国系・華人（74.1%）、マレー系（13.4%）、インド系（9.2%）など、文化・民族の多様性に富む。共通語（第二母語）として英語が使用されている。

2015 年はちょうど「建国 50 周年」にあたり、8 月 9 日の建国記念日に向けて「SG（シンガポール）50」と書かれた飾り付けが街中に溢れ、7 月に入って毎週土曜日に行われているという花火やライトアップ、空軍の航空ショーのリハーサルを見ることができた。絶品シンガポールチキンライスをはじめ、文化多様なこの国での食文化は充実している。現地の人々はみな実に親切で、小さな国土に観光名所がコンパクトにまとまっており、犯罪に巻き込まれる心配もなく夜の街を散



WAS 性の権利委員会メンバー

策することもできる。そんなシンガポールは、日本在住者にとっては「安・近・短」で人気の観光地である。

ところで、1963 年に英国から独立して数十年という短い間にアジア有数の経済拠点となったシンガポールは「ハイテク大国」でもある。今回の会場となったサンテック国際会議場はサンテック・シティと呼ばれる高層オフィスビルや巨大ショッピングセンター、レストラン街、映画館などが入る大型複合施設にあり、随所にハイテクを駆使したディスプレイが配置されていた。また、サンテック・シティの中心には世界最大級の噴水（「富の噴水」と呼ばれる）があり、風水に基づいて設計されている。内側に水が流れ落ちるようになってるのは「富が逃げない」ことを象徴しているのだとかいった説明を聞いたのだが、とにかく日本の「足るを知る」の美学からすればあからさま過ぎるように思える、「富」への欲望・執着を象徴するものが街中に溢れ、この国が効率的に経済を発展させてきたということに得心がいった。

厳しいルールと罰金で有名なシンガポールは FINE CITY（罰金の都）との異名を取る。「ガムの持ち込み禁止」や「ポイ捨て禁止」、違反すると、多額の罰金をとられることになる。「これぐらいはいいだろう」とこの国を甘くみてはいけぬ。1994 年に起こった「フェイ事件」では、路上駐車されていた車にスプレーで落書きをするなどした米国人高校生に対して「むち打ち刑」が執行され、世界中にそのニュースが配信された。ちなみにこの国では刑事罰としてだけでなく、学校における生徒への体罰としても「むち打ち」が合法化されており、国際的人権団体の抗議の的になっている。

さらに、シンガポールでは同性愛が禁止されており、LGBT の権利擁護団体と政府との攻防戦が続いてい

る。正確には、同国には同意にもとづく男性間の行為を禁止する刑法 377A 条が存在しており、これを違法とする申し立てが昨年最高裁で棄却された。WAS 国際会議の開催直前には、保守的なアイルランド（1993 年まで同性愛を犯罪化していた国）で同性婚が認められた記念すべき日に、シンガポール政府のメディア開発庁の圧力によってあるミュージック・ビデオ（PV）が放送禁止になったというニュースが流れた。PV には 30 年間をともに暮らしてきたレズビアンカップルが登場するなど、婚姻の平等（同性婚）を支持する内容となっていたという。刑法 377A 条の撤廃については、これに反対するリー・シェンロン首相（現職）が「シンガポールは基本的に保守的な社会であり、家族は社会における基本単位である。シンガポールにおける家族とは、一人の男性と一人の女性が結婚し、子供を授かり育てあげることである」と発言している。

どの国にも闇はある。ハイテク技術を駆使したディスプレイに溢れ、おしゃれなデザインの高層建築物が立ち並び、ゴミが目立たないクリーンな街だからこそ、存在して当然だと思われるモノや人を探してしまう。しかし、今回の滞在がいかに短かったとはいえ、それとわかるホームレスや車いすに乗った障がい者を見かけなかったというのは、さすがに「不気味」である。

若手研究者の活躍

最低記録となった参加者数のなかで、目立って多かったのはオーストラリア勢で、国別で次に多かったのが私たち「日本」だった。日本からの参加には、AOFS（アジア太平洋性科学連合）日本事務局が支給している国際会議参加助成金（各 10 万円）の対象者 5 名が含まれている。

この事業は、性科学の未来を担う次世代の育成・支援を目的として数年前から実施されているもので、その対象は「日本人」に限られない。資格要件は、①当該国際会議において研究等の発表予定があること、②現に日本国に在住していること、③年齢 18～35 歳位までの者であること、④大学等に所属する研究者または NPO 法人等で性の領域に関わる活動を行っている者であること、以上である。

今回は、厳選な審査を経て選考された以下の 5 名（敬称略）が、それぞれに大変興味深い研究発表をお

こなった。

- 染谷明日香（NPO 法人ピルコン理事長）
ポスター発表「日本の単位制高校における性行動と性教育効果の特徴」
- 中原由望子（兵庫教育大学大学院修士課程 1 年）
「セックスの有無と心理的関係性の強弱：高齢男性のパートナー関係」
- 村田 藍（社会福祉法人聖母会聖母病院助産師）
「セクシュアル・マイノリティにおける生殖補助医療に関する意識調査」
- デール・ソイヤ（東海大学等の非常勤講師）
「アイデンティティとセクシュアリティ：日本における X ジェンダー当事者のナラティブ」
- 米澤慶子（京都大学大学院医学研究科博士後期課程 3 年）
「生薬と男性性機能障害における系統的レビュー」

中高年以上の私たちには、こうした若手研究者らを支援する具体的方策を考えていく必要があるというだけでなく、若者世代の感覚や実践力から多くを学ぶべきである。そこで 5 名の「参加報告書」から一部を抜粋し、以下に紹介したい。

近著『マンガでわかるオトコの子の「性」』の売れ行きも順調な染谷氏は、参加報告書において「宗教や様々な文化的背景が異なるだけでなく、多様な学問領域からアプローチされる世界各国の、それも最新の研究を 4 日間に渡ってシャワーのように見聞きできたことは、大変刺激的な経験でした」と述べ、性教育に関して印象に残ったことを 3 点挙げている。

1 つには、「インターネットの性情報が新たな性教育の課題とされているのは、日本のみならず世界的に共通していること」で、玉石混交のインターネット情報に対するリテラシーを高めていくことが大事である一方で、「インターネットをうまく活用して、若者の悩み相談や交流の場をオンラインで作ったり、参加型で情報発信・交換をしている事例も見られ、日本国内でも是非そのような取り組みにチャレンジしたい」と思ったという。2 点目として、「性の快樂について性教育で扱うことについて、若者の権利として前向きに議論」されていることに驚いたという。国内では、若者の性行動自体を文化的によく思わない風潮に支配されているが、「セックスがもたらすポジティブな側面を伝える」諸外国のこうした事例に「若者の人権・性の権利に対する意識の違いや、大人達もまた健康的で

幸せな性を楽しめているかどうかがある」と感じたという。さらに3点目として「保守的な文化的背景を持つ地域であっても、工夫次第で性教育課題にアプローチしている事例」があることに感銘を受けたと報告している。「やり方次第では制限のある環境であっても性教育が実現できる可能性を感じた」という染谷氏の今後ますますの活躍に期待が膨らむ。

トランスジェンダーに関する研究を専門とする大学の非常勤講師デール・ソイヤ氏は、「社会学者による報告は少ない」という印象をもったという（実際のところ、少ない）。「性に関する医療、支援などのプロフェSSIONALが集まる場で、社会学者も参加する価値があると思いました。むしろ、参加するべきです。社会学という視点から、性に関する様々な問題が研究されてきました。この研究は、他の分野で働いているプロフェSSIONALにとっても役に立つと思うのに関わらず（原文ママ）、なぜか学問や大学の壁で、成果がうまく共有・発信されず、袋小路に入り社会に広がりません。社会学の研究も、このような学会に参加することでもっと豊かになると思います」。

学際性を謳う性科学の学会組織でありながら、メインプレイヤーとしては保健医療分野の専門家や研究者が圧倒的に多く、その傾向は国内においてとくに強い。ソイヤ氏のエールに応えられるよう、広く多様な人材と研究成果が繋がっていけるようにする工夫が求められている。

また、高齢男性のセクシュアリティについて研究を重ねている中原氏は、「カップル・夫婦の間の性的問題は世界のあらゆる文化圏において発生するが、今回発表したカップル間のセックスレスについては日本特有の性役割規範に基づく可能性が指摘された。個人の性的欲求のみならず、社会規範によっても意思・行動決定はなされる。セックスがカップルの親密性にどのように関与するのかについては、質疑応答時間に質問者によって、文化圏により比較検討する必要性を示唆された。（中略）国際比較研究はまだそう多くないが、こうして学会会場において他国の研究者と議論したり、他国の研究動向をみたりすることは、今後の研究に非常に大きな影響を与えると思われる。性というテーマに関心を持つ人々が集まった今回の学会において、私の今後の研究目標の詳細が定められた」として、WASの学術会議らしい一面を報告してくれてい



ミルトン・ダイヤモンド夫妻と大川玲子、波多野義郎氏

る。異なる文化・社会背景にある参加者から受ける指摘は国内の指導や助言にはないものもあり、こうしたクリティークや充実した議論を経験することは自身の研究をより豊かなものにする。その意義を十分に感じ取り、自分の血肉にしていける力をもつ中原氏がまた素晴らしいと感じた。紙幅の都合上割愛するが、こうした貴重な経験を綴った報告書は他の奨学生からも提出いただいている。

研究者に限らず多様な人材が関わることは、WASのミッションである「性の健康と権利の推進」にとって必要不可欠である。その意味でユース部会（WAS Youth Initiative）の目覚ましい活動は頼もしく、今回も柳田正芳氏（Link-R代表／WAS若者委員会）が「WAS若者円卓会議」の企画・運営に携わり、そこには助成金対象者も参加してくださったようである。「つながる、つなげる」をモットーに、今後も若手支援を展開してゆきたい。

遅すぎた WAS 金賞（ゴールド・メダル）受賞

WAS 国際会議では、「性教育」や「ベスト・アブストラクト」などの各賞が発表される。なかでも、生涯にわたる性科学への顕著な貢献を讃える「金賞」は、過去に受賞した某氏に言わせれば「性科学界のオスカー（アカデミー賞）」である。かの有名なキンゼイやマスターズ&ジョンソン、カーケンダール、故・朝山新一氏など、受賞者の顔ぶれには性科学界の「スター」が並ぶ。その意味では、今回ようやくハワイ大学の恩師ミルトン・ダイヤモンド博士が受賞したことについては、むしろ「遅すぎた」感が否めない。インターセックスに関する研究で世界的に高い評価を受けている

博士は、これまでも GIRES 研究賞（英国：1999 年・2010 年）、マグヌス・ヒルシュフェルト賞（ドイツ：2000 年）、アジア・オセアニア性科学連合賞（2005 年）、キンゼイ賞（米国：2011 年）など、世界中で各賞を受賞しており、世界各国に「教え子」をもつ。80 歳を過ぎた現在も、博士のもとに舞い込む講演依頼は後を絶たない。ユーモア好きの博士は受賞スピーチの壇上でいたずらっぽい表情を浮かべ、「金賞の荣誉に預かり大変光栄に思います。今回の受賞をとくに嬉しく思うのは、教え子である池上千寿子など、先に受賞した教え子たちの仲間入りを果たすことができたからです」と述べた。これには会場が大きな笑いに包まれ、スタンディングオベーションで博士の荣誉を讃えた。

未来への架け橋

ダイヤモンド博士からすればまだまだ「ヒヨっ子」の私も中高年層の仲間入りをし、後進に道を譲る時期を意識するようになった。そうは言っても、日本に育ち教育を受けた人たちにとっては、語学力が大きな足かせになるという現実もある。将来的にはハイテクのさらなる進歩によって解決されるかもしれない問題だが、現状で国際社会・学会で活動しようと思えばどうしても語学力（WAS では英語もしくはスペイン語）が求められる。語学力だけでなく、プレゼンテーション能力や異文化対応能力（Cultural Competency）も必要になってくる。



ダイヤモンド博士（中央）と WAS 会長（右）

そこで、AOFS（アジア・オセアニア性科学連合）日本事務局を預かる大川玲子（日本性科学会会長）や小貫大介（東海大学）、今福貴子（日本性科学連合事務局長）といった仲間と相談し、国際会議参加助成のほかにも、国際会議参加をより充実したものにするためのワークショップなどの企画を検討しているところである。「教える」というのではなく、仲間とつながり、ともに学び、考えるのがその目的である。こうした場にひとりでも多くの仲間（とくに若手）が参加してくれることが、性科学や性（セクシュアリティ）教育の未来を語り合い、学びあう機会を渴望している私たちの願いである。

※ 2016 年は第 14 回 AOFS 国際会議（3 月 31 日～4 月 3 日）が韓国・釜山で開催され、2017 年にはチェコ・プラハで WAS 国際会議が開催される予定。

JASE 性教育・セクソロジーに関する資料室

資料室について

JASE 資料室は国内外の性教育、性科学等に関する文献資料を収集している開架式資料室です。文献資料の数は約 6 万点以上、現在も日々、増え続けています。性教育、セクソロジーに関する調査、研究のためにご利用いただけます。人間の性に関心がある方、ぜひ足をお運びください。

【閲覧】 必ず事前に電話で予約が必要です（TEL 03-6801-9307）。貸出業務は行っておりません。

【開室日・時間】 月～金曜日 10:30～17:30

【休室日】 土・日曜日、祝日、年末年始 ※その他、会議等で臨時に休室することがあります。

【コピーサービス】 コピー料金は用紙サイズにかかわらず 1 枚 10 円です。著作権法の許容する範囲で行うものとします。

<http://www.jase.faje.or.jp/pub/archive.html>

資料室 利用方法

収集文献 ・資料

統計・調査報告書、ジェンダー・フェミニズム、性教育一般・性教育の歴史的資料、国内雑誌、障害者、セクソロジー（自然科学系、人文・社会学系）、民俗学・文化人類学・風俗、性研究史・性学史、教科書・指導書・学習指導要領、幼児期～青年期、国内学術誌、国際（海外団体資料・海外学術誌）、高齢者・家族問題、文学・評論・エッセイ・文庫・新書、官公庁資料、JASE 刊行物、映像資料、個人論文、雑誌記事、新聞記事、絵本・写真集・マンガ、江幡・篠崎・朝山・石川・ダイヤモンド文庫、ほか。

<http://www3.jase.faje.or.jp/cgi-bin/search1.cgi>

9月29日、全国に福山雅治さん、吹石一恵さん結婚発表ショックが走りました。祝福する声の陰で、その日は職場では早退者が出たり、食事の支度を放棄したお母さんが続出したり、所属事務所の株価の下落まで起こったと伝えられました。46歳と33歳という年齢差で吹石さんの誕生日に入籍ということでした。

有名俳優が結婚発表するたびに、女性側に関して「なお妊娠はしておらず、結婚後も仕事は続ける予定」というフレーズを聞いて鬱陶しさを感じていましたが、今回は幸い見かけませんでした。

しかし、安倍晋三内閣の菅義偉内閣官房長官が、「子どもをたくさん産んで国家に貢献してください」とコメントをしたあたりで、お祝いムードは吹っ飛びました。

折しも9月19日に安全保障関連法が参議院本会議で可決・成立し、集団的自衛権を法制化したことで、自衛隊が軍隊と見做されて派遣される可能性が増し、戦争放棄の平和条項である憲法九条に違反すると多くの憲法学者が言っている、その中での菅官房長官の発言は、「女性が輝く社会」を謳う現政権の正体を諷刺し、如実に表す破壊力抜群の一言でした。安倍首相にお子さんがないことも有名で、それを逆手にとる人もいますが、むしろそうだからこそ、子どもがないことが社会貢献していないというニュアンスを含む発言を官房長官がする意味は大きく、大きな人権侵害を首相に向けたことになるのではないのでしょうか。

◇ ◇

それと相前後して、文部科学省が今年配布した高校生向け副読本の中で使用された資料が恣意的に改竄されたという疑惑が上がっています。それによると22歳が妊娠しやすさのピークであるとされています。そもそも元のデータは妊娠しやすさを示したものではないこと、グラフのカーブが原出典と違って22歳を境に急激に妊娠しやすさが下がるように記載されていることなど、医学的にも科学的にも正しいとは言い難い

ものが、あたかも22歳までに産んだ方が良いとでも言いたげな資料として提示されています。

文部科学省が作成した資料が科学的でないのはそれを提出した産婦人科学会等の責任もありますが、どちらも残念ながらお粗末と言わざるを得ません。こうした専門家による残念な出来事が多すぎる日本で、それでも論理的であろうとするのは大変な努力がいることで、ここまでくるとリテラシーどころではなく、何を信じたらいいのか疑心暗鬼になってしまいがちです。

22歳までに産むとなると、女性は大学に行くということなのか、あるいは早急に各大学に保育所を整備したり、学生にも産休や育休制度を導入したりするののかと思えば、もちろん、そのような話もなく無責任極まりない、ただ女性を不安に貶めるだけの情報といえるでしょう。

◇ ◇

実際は、妊娠出産に最適なのは20代後半から30代前半です。理由は、妊孕性がさほど変わらないのと、妊娠経過や出産の安全性、そして児の予後まで比較的問題が少ないためです。また、昨今は30代後半での初産が、初産の15%を超えて増加しており、30代後半の出産は第2子、第3子を含めて20万件と、1980年の5万件弱、1990年の8万件弱に比べて増加しています。

これは、体外受精による直接効果だけでなく、出産トレンドとしての高齢出産が進んだための自然妊娠増によるもので、実際の出産は35-39歳では92%が体外受精ではない妊娠で、40-44歳でも85.2%が体外受精以外の妊娠によるものでした。それにも関わらずイメージが先行して、高齢出産は異常ばかりであるとか、妊娠しないものだと思い込まれ、無事に産んでいる女性たちまで何だか遠慮して小さくなっています。

逆に、高齢出産ばかりが問題とされがちですが、あまりに早く10代前半で妊娠してしまうと、骨盤が狭く卵子の未熟性もあり、帝王切開が多かったり、児の

異常もわずかといえ多いので、医学的にも問題があります。また社会的に経済的自立を果たしておらず、パートナーシップが成立していない場合は、シングルマザーになりやすく、子どもの貧困にも繋がっていきます。

このように一概に早く産めばいいとするような風潮は女性を焦らせるだけで、何の意味もありません。体外受精を頼りに、いたずらに妊娠を先送りにするのは問題ですが、出産環境を整えることの方が重要です。特に安全で快適な出産環境を整えることに関して、女性の意識も、それを取り巻く男性の意識も低いのが残念です。



日本は男女差別撤廃条約にも様々な違反をしており、その一つが、男女で婚姻可能年齢が異なっていることです。選挙権を18歳に引き下げようとしていますが、現状では女性は16歳で結婚できてしまいます。確かに16歳で妊娠した場合に、籍が入られるのは悪くないように思いますが、「大人」ではないことから、国際的には「児童婚」とみなされます。性別で異なる基準があることが問題となり、海外と状況は異なるものの児童婚が残っている国として、他のアジアの国と同じように見られているのです。

ついでに言えば、女性だけ再婚禁止期間が6か月とされており、これも明治時代を引きずって、女性が妊娠している場合に婚姻関係にある男性の子とみなすことから決められたものですが、今時、DNA鑑定をすればどちらの子かわかってしまうご時世、時代遅れの法律に他なりません。

また、刑法の堕胎罪が妊娠した女性のみ適用で、母体保護法で免責されているとはいえ、法律としては連綿と残されています。人工妊娠中絶に関しては、女性の身体権を保護するものではなく、女性が自己決定して行う形にはなっておらず、DV被害者でも婚姻関係にあれば原則的には会いたくない相手のサインを要することになっています。

これらを少しでも改善する策として、高階恵美子参議院議員が提出した「女性の健康の包括的支援に関する法律案」がありますが、リプロダクティブヘルスの内容的には骨抜き案とも言えるもので、引き続き慎重

に注視していく必要がありそうです。



性の健康については、女性だけでなく男性に対する支援も必要です。アメリカやオーストラリアで男女に無償で接種されているHPV予防ワクチンですが、日本では男性には打てません。男性の性の健康は医療の対象となっておらず、あまり議論もされないことは、残念なことです。

男性に対しては、5人に1人が結婚していない現状で、結婚して子どもがいて一人前とは言われなくなりました。男性も女性ほどではないにしろ、精子の状態は加齢の影響を受けますから、女子が22歳なら男子の結婚年齢にも言及すべきでしょう。このような俺はいいんだ、という考え方は、個々のカップルにも浸透していて、男性不妊が疑われても検査を受けたがらないなど、いつも女性ばかりが責任を負わされてしまいます。

今でも日本の避妊は権利としても科学としても先進国からみれば大きく遅れています。それでも今のようには避妊法もなかった時代は、女性は好むと好まざるに関わらず、生きていく道が子どもを産むことであり、妊娠しにくい女性は生きにくかったことでしょう。産んだ女性と産んでいない女性、という比較もおかしなことで、先ほどの首相の例でも言えるように、子どもがいないから政策に不備がある、という論調はいかがなものかと思います。

そうすると、医師はすべての病気を経験していなければ一人前でないことになるでしょうし、教師も、保育士も子どもがいるべきということになるでしょう。個人の事象を一般化し過ぎないことも、個を尊重する大事な考え方です。

誰が言ったかわかりませんが、「子どもを産んで一人前」。そのようなプレッシャーは意味があるのかなのか。一人前でないとしたらそれが何なのか。不妊女性、今や5人に1人と言われる生涯未婚の男性、結婚しない生き方。社会的責任を果たしていないと誰が決めるのか。この言説に心を痛める人はいても、誰も得をしません。政府を代表する人物が何を言おうと、それでも性の自由という概念の認識は以前よりは進んでいると思いたいものです。

性教育の歴史を尋ねる

戦後・純潔教育編

茂木輝順

第31回

『明るい生活—中学校高等学校における性教育の手引—』その2
(文部省初等中等教育局中等教育課1953年4月)

もてぎ てるのり
女子栄養大学大学院栄養学
研究科保健学専攻博士後期
課程修了、博士(保健学)

前回に引き続き、文部省初等中等教育局中等教育課(以下、中等教育課)が作成した『明るい生活—中学校高等学校における性教育の手引—』(以下、本書)について述べます。

本書が作成されることになったいきさつについて、1952年7月1日の『日本教育新聞』が次のとおり報じています。「文部省では(中略)教師用の指導書『明るい生活』(仮称)を作成することになり、近く編さん委員を選考着手することになった、これは先頃文部省で男女共学実態調査を行つたところ共学の弊害は積極的には認められないが、風儀上考慮を要するという結果が出たのにかんがみ、児童生徒男女間の学校内での交際の指導の仕方やできれば適当な機会に性教育をも施そうという目的であるが、狭い意味の性教育ではなく、従つて社会局の性教育コースとは構想を異にし学校内で男女児童生徒が肉体的、精神的に健かに育まれるよう指導することを目的としている」⁽¹⁾。

この記事は、本書を作成するきっかけが「男女共学実態調査」にあったことを伝えています。この調査は1952年2月に中等教育課が「全国都道府県教育委員会指導事務主管部課長会議」の際に実施したもので⁽²⁾、この調査の実施には、同年1月の参議院本会議で男女共学制の再検討についての質問⁽³⁾があったことが、おそらく、関係しています。この調査の結果を紹介した同年5月10日の『日本教育新聞』によると、男女共学と風紀問題との関係について、33府県が「関係なし」と回答したものの、「両者関係あり、共学は好ましくない」(鹿児島)、「共学になつてから問題は多くなつていふと思う」(神奈川)など4県が「関係がある」、2県が「少しは関係がある」と回答しており、また、「共学と風紀問題は無関係だが、相当の研究と指導が必要である」(岐阜)、「共学が必然的に風紀問題を起こすとは考えられない、しかし男女生徒の交際には十分注意、指導しなければならない」(和歌山)など6県が「指導を充実しなければならない」と回答しています⁽⁴⁾。この調査では、男女共学が男女間の風紀

を乱しているという意見は少数であったものの、中等教育課は中学生・高校生への風紀に関する指導の指針を具体化する必要があると判断したようです。同年5月28日には、本書の第一回作成準備懇談会が「中等教育課を中心に、現職教員、専門家をあつめて」開催されています。この懇談会によって、本書は「①男女共学の効用、②青少年団体の意義、③医学的、心理的な発達と学習、④健全な交際、レクリエーションなどを骨子に、教師が男女生徒を正しく理解し、相互の関係を健全に発展させるなどを内容とすること」が決められ、当初は、同年9月の「新学期までに」本書を刊行する計画であったようです⁽⁵⁾。同年8月12日の『日本教育新聞』は、本書の原稿の整理が8月中に終わり、教育現場で使用され始めるのは10月頃ではないかとの見通しを報じています⁽⁶⁾。

ところが、この記事以降、管見の限り、本書についての報道を見つけることができません。また、前回述べたとおり、本書は未発表のままお蔵入りとなります。

本書についての最大の謎は、一応完成していたにもかかわらず、なぜ本書がお蔵入りとなったのかという点です。この謎に迫るための史料を見つけれられていないので、あくまで仮説になりますが、理由の一つに以下のようなことが考えられます。本書と同時期に純潔教育分科審議会が作成していた「純潔教育の進め方(試案)」との整合性を図るため、つまり、文部省内に、本書と「純潔教育の進め方(試案)」という、異なる二つの指針や教育課程を併存させないほうがよいという判断から、本書が未発表になった可能性が考えられます。

(注)

(1)『日本教育新聞』1952年7月1日 p.2

(2)「中等学校における諸制度の調査報告」『中等教育資料』1巻7号明治図書出版1952年8月 pp.22-25

(3)1952年1月29日の参議院本会議で、天野貞祐文部大臣が「男女共学のことにつきましては、これは小学校と大学は問題ございませんけれども、中学と高等学校では問題だと思います。併しこの現場にある人たちの意見を聞いてみても両説がありますので、研究を要すると思つております」と答弁しています。

(4)『日本教育新聞』1952年5月10日 p.2

(5)『時事通信内外教育版』1952年6月3日 p.2

(6)『日本教育新聞』1952年8月12日 p.2

BOOK GUIDE

今月のブックガイド

家族という逆説

『家族という病』が大ベストセラーになっている。もちろん、著名な文化人が著した本であるからして売れるのは理解できるが、それにもしても50万部を超えると、これは一つの社会現象の様相である。

内容は家族関係にまつわるエッセイと、下重さん自身の家族に関する回想。巻末は亡くなった彼女の父、母、兄へ向けて綴った手紙で締めくくられている。

下重家の父親は旧陸軍の将校だったが、敗戦後、娘の暁子さんの目には「落ちた偶像」となった。彼は妻に手を上げるような父権的な男だったので、戦後民主主義の時代に羽ばたこうとしている娘とは相容れなかったようだ。具体的なエピソードに乏しいのだが、最期まで病床に父親を見舞うこともほとんどなかったというのだから、彼女の怨嗟のほどが伝わってくる。

母親はそうした夫に寄り添う日本の妻で、また娘にとっては、子どもを溺愛する重たい親だった。独立志向の強い下重さんはそれを疎ましく思っていたし、そういう女性を侮蔑的に見ていた。兄との関係も、父と折り合いが悪くなって彼が下重家を出ると、疎遠になった。

このように下重さんは家族との絆が希薄で、いや、むしろそこに背を向けるようにして生きてきた。ご自身は結婚して夫がいるが、彼との間に子どもはおらず、男女の役割分担に従う夫婦であること拒否し、パートナーとして互いの自立を尊重し生活してきたという。

概して、依存的な家族関係は否定すべきものとし、本書でも家制度の残滓のようなありさまをことごとく批判している。その主張に反対する必要はまったくないが、ただ、ここにはとくに目新しい視点や切り口はなく、戦後の家族の理想を繰り返し主張しているにすぎない。

また、彼女は家族関係を「社会の縮図」、「小型の国家」と見なしているのだが、それも考察として一面的すぎる



家族という病

下重暁子著
幻冬舎
定価 780円＋税

だろう。そもそも、夫婦が友人関係のなかでもっとも親しいもの、にすぎないのならば、わざわざ結婚する必要はない。ましてや、著者の夫婦には子どもがいないのだから、結婚制度に参入する意味はないはずだ。

法律婚が事実婚はともかく、私たちがあえて「夫婦」「パートナー」というふうに関係を名付け、それを求めるのは、そこに社会的な関係とは異なる「何か」があるからで、その「何か」こそが結婚やパートナーシップの本質に違いない。そういう意味で、家族論としての掘り下げや、著者の自己分析にいささか不満が残る。

しかし、この本がこれだけ多くの読者に求められるのには理由があるに違いない。一つには、『家族という病』というタイトルに、強い引きがあるのだろう。「病」という隠喩が、家父長制的なルールが通用しなくなったはいいが、一方では、機能不全に陥っている今時の家族を言い当てている。

もう一つは、著者の父親に対する解消しえない憎しみ。最後の手紙の内容も、長い時を経て自分を客観視しているとはいえ、行間からは未だにこじれた不満がほとぼしっている。近年、親への恨みつらみを綴った本が目ざされているが、本書も一種の毒親本と考えれば、市場の反応にも理解ができる。その、容易に和解には至らない親への感情が、これほどまでに読者の共感を得ているのではないか。

こうした風潮は、家族が解体される兆しなどではなく、むしろ反対に、家族への過剰な期待ゆえの反動であろうし、そうした執着は、著者の文章にも濃厚ににじみ出ている。

「(父は) 私にとってはじめての身近で格好いい男性でもありました。それがことごとく打ち砕かれていくことが耐えがたかったのです」

過大な期待からくる失望。こんなに憎んでいるのにこんなに求めてしまう…その濃密さこそが家族という逆説なのである。
(作家 伏見憲明)

▶▶ 11月3日(火・祝日) 13:00～17:30 ◀◀

東京性教育研修セミナー

「学校でのLGBTへの新たなとりくみ?～文部科学省通達をうけて当事者と考える」

内容 「文部科学省の通達のポイント」池上千寿子(ぶれいす東京)、「性的マイノリティが直面する困難と教育の課題」・若者の立場から/渡辺大輔(埼玉大学)、親の立場から/小林りょう子(LGBTの家族と友人をつなぐ会)、「グループワーク」ほか

会場 日本性教育協会セミナールーム(東京都文京区小石川2-3-23春日尚学ビルB1)

参加費・問い合わせ 参加費:1,000円(資料代含) 定員:30名。
申込受付:件名を「11月3日セミナー申込み」とし、氏名・所属を明記のうえ下記問合せ先アドレスまで。

対象:性の健康と性教育に関心のある方、教職員、助産師、保健師、学生等。

主催:特定非営利活動法人ぶれいす東京 協賛:日本性教育協会

問合せ先:E-mail office@ptokyo.org TEL 03-3361-8964(月～土12～19時)

▶▶ 11月28日(土) 13:30～16:30 ◀◀

第2回 北東北性教育研修セミナー「性の健康と権利Ⅱ」

トランスジェンダーを取り巻く社会病理 ～地域社会の実践者たち～

講師 土肥いつき氏(京都府立高校教員、セクシャルマイノリティ教職員ネットワーク副代表)
真木 柁鷹氏(性と人権ネットワークESTO代表)

会場 青森文化観光交流施設 ねぶたの家ワ・ラッセ 多目的室2(青森市安方1-1-1)

参加費・申込み先等

参加費:一般1,000円、学生/NPO関係者500円 主催:北東北教育研修セミナー実行委員会 協賛:日本性教育協会

申込み先:E-mail rc-net@goo.jp 又は青森市安方1-3-24-2F(セミナー事務局)までお名前・参加費の区分・連絡先を明記してお申込下さい。

11
/ 28(土)

10:30～16:00
(受付開始10:15)

第25回関東甲信越静岡性教育研究大会(茨城大会)

基本テーマ「生きる力を育み、将来へつながる性教育」

～社会にできるまでに伝えておきたいこと～

場所 イーアスホール(つくば市研究学園5-19 イーアスつくば2階)

主催 いばらき性教育研究会、全国性教育研究団体連絡協議会、関東甲信越静岡性教育研究団体連絡協議会

内容 講演:「小・中・高校生向け性教育」高橋幸子(埼玉医科大学)、「思春期男子の性教育」天野俊康(長野赤十字病院)、
「道徳教育と性に関わる指導～異性理解、ほか～」澤田浩一(文部科学省初等中等教育局教育課程課)
パネルディスカッション:「小学校卒業までに・中学校卒業までに・高校卒業までに伝えておきたいこと」

【参加対象者】 幼・保・小・中・高・特別支援学校・専門学校・大学の教職員および保護者・カウンセラー、
医療・保健・福祉・司法関係者、保護司・青少年育成関係者、学生ほか

【定員】 150名 **【参加費】** 2,000円・学生は1,000円(資料代含)、※懇親会3,000円(16:30～18:00)

【申し込み方法】 郵便振込(振込先00160-0-766655 振込先名:和田由香)締め切り10月24日(土)
(氏名、所属、職種、懇親会参加の有無を通信欄に明記のこと)

【問い合わせ】 〈大会事務局〉茨城大学教育学部教育保健教室 廣原紀恵

FAX 029-228-8650 E-mail ibarakiseikyoyuiku1201@gmail.com

▶▶ 11月6日(金)～7日(土) ◀◀

東京ウィメンズプラザフォーラム

内容 **6日：シンポジウム**「女性が活躍できる社会へ～女性リーダーの育て方～」(無料) **ワークショップ**「日本とこんなに違う！ノルウェー・ベルギー」(無料)、「声なき声を聴く～暴力に遭ってしまう人生を考える～」(参加費500円) ほか。
7日：イベント「男女の子育てに参加に向けたイベント」(無料) **ワークショップ**「大学生によるデートDVワークショップ～寸劇・歌・ダンス～」(無料)、仲間同士で支え合うピア・スーパービジョン「SFRチーム」体験会(参加費1500円) ほか。
両日展示「アジア諸国におけるジェンダー平等の取組～ICTが拓く女性のエンパワーメント～」など。

会場 東京ウィメンズプラザ
 (東京都渋谷区神宮前 5-53-67)

主催・問い合わせ等

主催・問合せ先／東京ウィメンズプラザ
 〒150-0001 東京都渋谷区神宮前 5-53-67
 TEL 03-5467-1980

11/15(日)

11:00～16:00

第7回
 あるこうよ
むらさきロード2015
 東京・表参道近辺

主にDVや性暴力、子どもの虐待などの サバイバー(被害経験者)と一緒に歩くパレード

DV問題のみならず、性暴力、虐待、既存のジェンダー観によって疎外されていたセクシャルマイノリティ、女性の貧困、依存症などの問題にかかわっている人々、多くの方々と手を広げつないでいきたいと考えています。

「楽しく」・「平らに」・「多様に」暴力を容認せず、人と人が尊重して対等にゆるける社会を目指して、うねりを起こしましょう。

【問い合わせ先・申込み先等】

参加費／カンパ (1口1,000円・自由)
 申込み・問合せ先／むらさきロード実行委員会
 TEL & FAX 03-6807-8442～3
 E-mail arukoumurasaki@yahoo.co.jp
 委員会ブログ <http://arukoumurasaki.blog37.fc2.com/>
 後援／内閣府男女共同参画局、東京都

▶▶ 11月22日(日) 13:00～17:00 (受付12:30～) ◀◀

生徒によるエイズ予防ピアエデュケーションとは！

生徒によるエイズ予防ピアエデュケーション活動がどのように始まり、どのように活動しているのか！

講師 平野 智之氏(大阪府立信太高等学校長) 飯沼 恵子氏(泉佐野保健所保健師)

会場 大阪府立大学 I-site なんば 2階会議室(大阪市浪速区敷津東2丁目1番41号 南海なんば第1ビル)

参加費・申込み先等

参加費：無料 事前申込：不要 主催：Positively 共催：大阪府立大学セクシュアリティ教育研究会
 問合せ先：E-mail ape@prtntsrns.net 対象者：学校教員(中学校・高等学校・大学・専門学校等に在職中の方)、保健所職員、医療従事者

性教育ハンドブック Vol.6



『「ありのままのわたしを生きる」ために』

土肥いつき著

◆A5判：82頁、頒価500円

主な内容 港にて(自分史の試み…) / 船出のとき(小さなトゲのような思い…) / 帆をあげる(教員生活のはじまり…) / 舵を切る(「身体改造の」開始…) / 嵐の中で / かすかに見えた航路 / 新たな旅へ

著者プロフィール 1985年より京都府立高校教員。セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク副代表、トランスジェンダー生徒交流会世話人、まんまるの会(関西医科大学附属病院ジェンダークリニック受診者の会)世話人代表など。映画『coming out story』に出演。

既刊(性教育ハンドブック)

☆性教育ハンドブック Vol.5 『21世紀の課題=今こそ、エイズを考える』池上千寿子著 A5判・68頁500円

☆性教育ハンドブック Vol.4 『性教育の歴史を尋ねる～戦前編～』茂木輝順著 A5判・92頁500円

※送料：1～4冊180円、5冊～8冊360円、9冊510円、10～14冊870円、15冊～19冊1180円、20冊以上無料。

◆JASE ホームページ <http://www.jase.faje.or.jp/pub/pub.html> からお申し込みいただけます。
 または、Email info_jase@faje.or.jp TEL 03-6801-9307 FAX 03-5800-0478